日系企業就職マニュアル

日企就职指导实用教程

主　编　刘慧云
副主编　黄　琴　高　丽
　　冉　光　贺　黎
审　稿　大津夏生

国防工业出版社
National Defense Industry Press

日企就职指导实用教程
日系企業就職マニュアル

主　编　刘慧云
副主编　黄　琴　高　丽
　　冉　光　贺　黎

國防工業出版社
·北京·

内容简介

本书结合专业和就职知识与技巧，旨在指导大学生和相关企业员工掌握应聘日资企业的技巧，了解日资企业文化和职场规范。全书由五部分构成，详尽介绍了日本社会、文化，日本一般性企业文化，日资企业里的基本礼仪常识，日资企业的工作流程，解析了术职日资企业的面试技巧，收集了各部门的专业用语等，并配有针对性练习和参考答案。

※

国防工业出版社出版发行

（北京市海淀区紫竹院南路23号　邮政编码100048）

天利华印刷装订有限公司印刷

新华书店经售

*

开本 787×1092　1/16　印张 13¾　字数 316 千字

2009年1月第1版第1次印刷　印数 1—4000册　定价 30.00 元

（本书如有印装错误，我社负责调换）

国防书店：(010)68428422　　发行邮购：(010)68414474

发行传真：(010)68411535　　发行业务：(010)68472764

まえがき

中国の改革·開放にともなう中日両国経済交流の拡大につれて、日本企業が競って中国に進出してきました。それと同時に、日本語学習者が急増しました。雑誌『人民中国』のアンケート調査によると、「就職のために日本語を学び、将来日系企業に入りたい学生がとっても多い」ということです。また、日本の文化を理解することで培われた学生たちの人間性が日系企業から高く評価されています。しかし、「日系企業に入りたい。でも日系企業での仕事のやり方がわからない。」「日系企業に就職したはいいが、上司の考えがわからない。」「企業文化に慣れない。どうしよう。」などという悩みを持っている学生が多いです。本書はそうした悩みを解決するために編纂したもので、日本社会文化、ビジネス日本語、日系企業面接対策、仕事要領、ビジネス文章フォーマット、礼儀等の内容を含んでいます。特に、就職指導に関する諸問題について、具体的にわかりやすく説明し、日系企業がどのような力を持った人材を求めているかについて探り、学生の就職活動をより円滑に推進することを目的としています。本書が日本語学科の学生諸君、また日系企業に就職を考えている方に、些かでも、役立ってくれることを願ってやみません。

顧みるに、本書を書くにあたっては多くの方々にお世話になり、多数の資料を参考活用させてもらいました。引用または参照させていただいた方に対して、心からお礼を申し上げたいと思います。

2008.12

目　次

第一章　日本社会・文化……1
（一）日本人の家庭生活……1
（二）日本人の風俗習慣……5
（三）日本人の国民性……14
（四）日本人の集団意識について……15
（五）日本人の死生観……16
（六）日本人の言語行動……17
（七）恥の文化……19
（八）日本人の勤労意識……20
（九）日本人の喜怒哀楽……22
（十）日本人の微笑……22
（十一）日本人とタテ社会……23
（十二）日本人の娯楽観……25
（十三）日本人の中流意識……25
（十四）日本人と付き合う法……26
第二章　企業経営……27
（一）日系企業が求める中国人材……27
（二）企業経営の特徴……28
（三）企業における意思決定の仕組み……28
（四）雇用関係の特徴……29
（五）男女雇用機会均等法……30
（六）年功序列……30
（七）定期採用と定期昇給……31
（八）労使関係……32
（九）労働時間……33
（十）賃金水準……34

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（十一）自主管理活動……34
（十二）定年……35
（十三）ビジネスマンの付き合い……35
（十四）日本上司との愉快な付き合いのコツ……36
（十五）日本的商談……40

第三章　就職活動のプロセス……42

（一）自己分析……42
（二）企業の選定……51
（三）会社の研究……54
（四）情報収集……56
（五）応募書類……62
（六）筆記試験と内定……82

第四章　新入社員の心構えとビジネスマナー……87

（一）新入社員の心構え……87
（二）ビジネスマナー……89
（三）服装のマナーと身だしなみ……115

第五章　言語使用と仕事の流れ……123

（一）言語規範……123
（二）会話の基本……127
（三）書き言葉……135
（四）身振り言葉……166
（五）仕事の明確化に向けて……170
（六）仕事を受ける……176
（七）仕事の実行……181
（八）仕事の完成……190
（九）仕事結果の報告……193
（十）仕事の引継ぎと辞職……195

練習問題……203

参考文献……213

第一章　日本社会・文化

（一）日本人の家庭生活

1. 洋服と和服

現在日本人は、日常ほとんど洋服を着て生活していますが、和服は正装として、あるいは室内着として現在でも愛好されています。

女性の着る和服は、着物として外国でもよく知られた美しい衣装です。このうち一番豪華なものは、花嫁が着る打ち掛けです。これは絹の布地に金銀の箔を織り込んだ金糸、銀糸で刺繍を施し、多くは花鳥の図案模様を描いたものが用いられます。

一般の女性が着物を着るのは、正月、成人式、大学の卒業パーティー、結婚式、同披露宴、葬儀などです。このほか未婚の女性と既婚の女性では着物の模様色合いが異なり、正式な訪問か遊楽のためなどあるいは外出の目的によっても、布地、模様、色合、仕立て方などが異なります。

洋服が体形に合わせて作られているのに対し、着物は体形との相関関係がルーズで、着付けによって身体に合わせるため着方が難しいです。日常洋服で生活している最近の若い女性の大部分は、自分一人で着物を着ることができません。

着物の持つ奥床しさ、落ち着きの美しさは、染織の美しさによるということ以上に、着物を着ることによってかもし出される雰囲気によるといわれます。

男性が着物を着るのは、現代では主としてくつろぎのための室内用に限られますが、正月などに自宅において客をもてなす時などには、和服を着ることは珍しくありません。和服の正装では羽織、袴をつけます。

最も軽便な室内着として、木綿地の浴衣があります。特に夏期に、入浴後ゆかたを着て室内の風通しのよいところで涼をとり、くつろぐのには最適なものです。

2. 食生活

① 食生活

日本は、昔から食事を主食と副食に分けて考える習慣があります。主食というのは、日常の食事の中心となる食べ物で、普通は穀物です。副食というのは、その穀物とともに食べる肉や魚や野菜などのおかずのことです。日本では主食は米です。日本人の米食の歴史は古く、すでに弥生時代から始まっていたと言われています。副食の中心は、魚や貝や野菜でした。

日本料理に使う調味料で、重要なのは醤油でしょう。中国や東南アジアにも似たものがあることはありますが、豆腐や刺身を食べる時など、かけたりつけたりしてもつかわれ、和食になくてはならないものです。味噌も、醤油ほどではありませんが、味

噌汁をはじめ煮物などいろいろな料理によく用いられます。もちろん、塩、砂糖,酢、ソース、それに、最近は化学調味料も欠かすことはできません。日本料理は、一般的に、味があっさりしているといわれています。東南アジアのスパイスを使った辛い料理や油を使って、揚げたりいためたりするものが多い中国料理などと比べると、そのことがよくわかります。新鮮な材料が豊富に手に入る日本では、その材料の持ている味や香りを生かすことが料理の基本なのです。したがって、使う材料の最もおいしい時期を選んで料理をすることが大切で、また、食卓の料理によって季節を感じるのです。更に、作った料理を入れる器も、料理によって、季節によって、色、形、材質などを考え、合うものを選びます。「日本料理は目で食べる」という言葉があるように、ただ味さえよければいいというのではなく、見て楽しむことも大切だと考えられているのです。

戦前までは、多くの家庭が和食中心でしたが、戦後、特に昭和３０年代からの高度経済成長とともに、食生活はバラエティーに富むようになったと言われます。学校給食の影響もあって、パンが広く食べられるようになり、洋食、中華と、家庭の料理も豊かになり、豚肉、牛肉などの肉類や卵、乳製品なども多く食卓に並べられるようになりました。また、大都市では、すし、てんぷら、そばなど和食の店のほかに、中国料理、フランス料理、ロシア料理を始め、イタリア、ドイツ、スペイン、メキシコ、インドなど各国料理の看板が見られるようになりました。世界の味が手軽に楽しめることは国際化の一つであるといえます。

種類が増えただけでなく、便利にもなりました。温室のおかげで、野菜や果物の多くが、一年中いつでも食べられるようになりました。また、スーパーへ行けば、お湯をかけたり、暖めたりするだけで、すぐ食べられる即席ラーメンなどのインスタント食品や冷凍食品も数多く並んでいます。その上、フライ、てんぷらなどの調理済みの食品の数も増えたし、買って持ち帰り、そのまますぐに食べられる温かい弁当を売る店も盛んになりました。更に、フライドチキンやハンバーガーなどを売っているファストフードの店では、待たされることもなく、すぐ温かいものが食べられます。

このように、社会の変化につれて日本人の食生活も多く変わってきているのです。

② 日本料理の特色

古来より現在に至る迄、日本人の嗜好、味覚の基は「自然な風味を楽しむ」ことにあり、日本文化の伝統が調理の中にも表現されています。

このため日本料理は他国の料理に比べ、概して淡白です。素材の持ち味をこわさずにそのまま調味します。あるいは、さらに引立てるように調理することが、伝統的な日本料理の源流にあります。

日本料理の味つけの仕方の特色に「だし」があります。「だし」は主として昆布、かつお節、しいたけ等を煮出したもので、この煮出し汁をベースにして各種調味料を加え用います。この「だし」は、汁物に使用する他、煮物にも利用されます。その際、味をつけるというより、むしろ、それぞれの魚貝類、野菜等の持ち味を最大限に引出すことを目的としているので、作る料理によって「だし」を取る材料や取り方も違い

ます。

現在の日本料理は、「味」のつけ方によって関東風と関西風、二つに大別されます。素材も海の幸、山の幸等できるだけ季節感を活かしたものを選んで使います。素材のもつ形をこわさずに、見た目の感覚を大切にして調理する技巧が用いられ、さらに料理の種類にそれぞれマッチした芸術的な和食器に盛りつけられます。また、食事を楽しむ空間も、自然の中や、日本庭園を見ながら等いろいろ工夫が凝らされ、人間の五感を通して食事を楽しむことが日本料理本来の特色です。

③ 伝統的な日本食

伝統的な日本食に次のようなものがあります。

ア、本膳料理　室町時代に武家(ぶけ)の礼法とともに定められたもてなしの形式が基になった料理。現在では、冠婚葬祭などの儀礼的な料理としてわずかに残っているだけですが、ほかの伝統的な日本食の形式や作法上の基本になっています。

イ、茶懐石　茶の湯で茶を出す前に供する簡単な料理。懐石とは、暖めたい石を懐に抱いて腹を温めるのと同じくらいに、空腹をしのぐという意味です。懐石料理とも言います。

ウ、会席料理　本膳料理よりずっと形式ばらず、くつろいだ形の宴席料理です。言うなれば日本のパーティー料理です。現在の日本料理店で供する宴席料理の多くがこれです。

エ、精進料理　魚介類や肉類を用いらずに、大豆加工品や野菜、海草などの植物性食品だけを使った料理です。

オ、おせち料理　正月のお祝い料理で、五段重ねの漆塗りの重箱に各種の料理を詰めだすものです。昔は、特別の行事の日に、神に供える料理のことを言っていました。

3. 日本の住宅

① 日本の住宅事情

日本は狭くて、土地が高いので、「兎小屋」と呼ばれている小さい住まいが普通です。たいていの日本の家には、洋間と和室があります。

和室は床に畳が敷かれている部屋で、板張りや絨毯などが敷かれている洋室と区別されています。重ねたむしろをいぐさで覆った畳が作られるようになったのは室町時代(1333～1568 年)のことです。畳の大きさは地域によってやや異なるが、部屋の大きさを表すときに畳の数が用いられます(例えば、6 畳、8 畳)。また、和室は壁のほかに障子やふすまでしきられていることが多いです。障子は木製の枠に薄い紙(障子紙)を張ったものです。障子は光を取り入れることから窓に取りつけられたり、飾りとして使われたりしています。インテリアの洋風化に伴い、障子のある家は減ってきています。和室には押し入れが作りつけられていることが多いです。また、床の間をもった和室があります。いろいろな床の間がありますが、書院造りの床の間では、一段高くなった床に畳や板などが敷かれ、その前面は床がまちと呼ばれます。上部には、床がまちと平行に横材(落としがけ)が取りつけられています。床の間の横には、床柱、

障子窓(書院)を接して飾り棚(床脇)があります。床の間の正面の壁には掛けものが飾られ、床には生け花や焼きものなどの美術品が置かれます。

そして、日本の住宅には必ず「玄関」と呼ばれるホールがあります。この玄関は家の入口であると同時に外用の靴で入れる境界をも意味します。日本の住宅の部屋では、外用の靴のまま入ることはありません。必ず玄関で脱いで、室内用のスリッパに履き替えるか、素足のまま、つまり室外用の靴を脱いだ状態のまま入ります。

共同住宅などでは、玄関と部屋の高さがあり変わらなく、玄関に続く部屋の床はジュタンである場合もあります。会社のオフィスは床に敷いてあっても通常靴のまま歩きますが、住宅の場合には外用の靴のまま入るのは厳禁です。特に他人の家を訪問したときなどは十分気をつけましょう。

② 日本の住宅に関する慣習・システム

ア、靴

日本の家屋は、玄関の土間から廊下に入るところで一段高くなっており、そこで靴を脱いで家の中に上がります。日本人は伝統的な敷物である畳の上に直接座ったり、布団を敷いて休んだりしますので、土足は厳禁です。

イ、風呂

日本の風呂場は浴室とトイレが分かれています。大きなホテルや新しいアパートなどでは欧米風の浴室の設備があります。日本では風呂に入るのは、洗うだけでなく温まったり、疲れを取ったり、くつろいだりするためでもあります。何人かのひとが同じ風呂を交替で使うので、浴槽のお湯はきれいにして使います。

<風呂の入り方>

- 浴槽に入る前にお湯を汲んで体をよく洗います。
- 浴槽に入るとき、お湯が熱いかもしれないので注意してください。
- 石鹸で体を洗うときは、浴槽から出て行います。
- その後、石鹸を洗い流し、浴槽に入って温まります。
- 浴槽のお湯を清潔に保つために、浴槽で体を洗ったりタオルを浴槽に入れることはしません。

ウ、畳

畳は、藁を糸でさして５．５㎝位の厚さのマット状にし、い草を編んだものをかぶせた日本の伝統的な敷物で、部屋の広さを示す単位になっているほどです。新しいものは青色で、何年かに一回、または引っ越してきたときに取り替えます。日本の家に上がるときは、靴を脱ぎスリッパに履き替えます。畳の部屋にはスリッパを履いて入ってはいけません。

エ、布団・ベッド・押入

日本家屋では、一般的に毎日夜に布団を敷き、朝にたたんで片づけます。日中布団は押入にしまっておきます。こうすると、同じ部屋を広く、色々な目的に使えます。畳の上にベッドを置くと、畳がへこんでいたむので、板などをベッドの脚の下に置くとよいです。

（二）日本人の風俗習慣

1. 贈答

日本人は最もプレゼントをするのが好きな国民だとよくいわれます。ほかの国では、結婚や誕生日のときには、当然プレゼントを贈りますが、普通に伺うときでもお土産を持っていって、敬意と友好を表すことに、日本人は慣れています。

日本の贈り物の中で、最も代表的なものはお中元とお歳暮です。中元は6、7月で、暑中の挨拶を表し；歳暮は年末で、一年の間に世話になったことへの感謝を表します。お中元もお歳暮も、季節的な贈り物です。近代の合理主義者が「虚礼廃止」と主張し、批判していた時期もありましたが、個人や会社の間では、このようなことが相変わらずに流行っています。そこで、デパート間の商業上の競争も日々激しくなっていき、最近では、いろいろな新しい項目を設けることによって競争するデパートも少なくないです。例えば、家にいても直接に商品を注文できたり、希望の時間帯に届けてくれたりすることなどが挙げられます。

引越しのときにそばを食べて、あるいは、新居の近隣の人たちにそばを贈って、引越しの挨拶をします。そばではなく、ハンカチやお菓子などを贈ることもあります。

それ以外にも、子供たちの「七·五·三」、入学·進学·成人式·同僚の昇進のお祝い、友達の全快のお祝いなど贈り物の名目には確かにいろいろあります。一家の経済を把握する主婦たちにとって、このような交際費用を工面することはかなり大変なことです。それゆえ、主婦たちのこの悩みを狙って、「贈り物を買い取る業種」が時運に応じて現れました。多くの家庭では同じものをたくさんもらって、長い間使われないまま、山のように詰もってしまっているところもあります。この業種の人たちは、そのような贈り物を安値で買い上げてから、また廉価で売り出します。なので、主婦たちには大好評です。

一見してみると、このようなやりかたは理屈に合わないかもしれません。しかし、これこそ合理主義では説明できない日本の贈り物の風習の本質——微妙な人間関係を非常に重視しているということです。

2. 日本人の一年

まとまった休暇がめったにとれない多くの日本人にとって、大半の職場休みになる正月は一年中で一番のんびりする期間です。日ごろ世話になっている人、仕事の得意先への年始回りなど、まるきり仕事抜きというわけにもいきませんが、それでも、こたつを囲んで、おとそを飲みながらテレビの正月番組を見たり、いつもは接触時間の少ない子供たちとも親子の対話をして過ごせます。

1月5日か7日ぐらいから仕事が始まりますが、2月始めぐらいまでは付き合いを大事にする日本社会の慣例として、職場の同僚や知人との新年会に忙殺されて、正月気分がなかなか抜けません。その時間を過ぎると、今度は4月まで落ちつかない季節が続きます。というのも、職場や学校などの新年度が始まるのが4月だからで、自身の職場での人事異動がどうなるか、転勤はないか、子供がいる場合は子供たちの入

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

学·就職は大丈夫かと、なにかと心配事が多くなります。

どうにか新しい生活のペースに慣れるのが５月ごろです。一息ついたところで、6月半ばすぎから7月にかけて、夏のボーナスが支給されます。住宅ローンを払ったり貯蓄に回した残りで、自分の欲しかったゴルフクラブなどを買い、妻や子供たちにも何か買ってやるのが、日ごろ宮仕えの身のサラリーマンにとってはささやか楽しみです。

7月下旬から約１か月間、子供たちは学校が夏休みに入ります。父親もその間に１週間ぐらいの夏休みをとるのが普通です。日ごろ働きづめの父親としては家でゆっくりくつろぎたいところですが、旅行やドライブなどの家庭サービスでふだんの日より疲れてしまいます。逆に妻や子供たちだけを里帰りや旅行に出し、父親は「にわかやもめ」で留守番というケースが多いです。夏休みとは言えゆっくり憩えないのがつらいところです。

気候が穏やかな秋は行楽シーズンです。職場の運動会などに家族そろって参加して体を動かしたり、紅葉を求めてドライブやハイキングに行く家庭が多いです。

12月に入ると、夫は年末の休みに入る27・28日の仕事納めまで忙しく仕事に追われ、妻は大掃除や正月準備であわただしく過ごします。12月31日の大みそかには、家族そろって年越しそばを食べながら、NHKの年末恒例番組「紅白歌合戦」などを見て、新年を迎えります。

3. 日本の年中行事

新年

正月

伝統的に、正月と呼ばれる新年の祝日は、収穫の神に感謝し、家族を守る先祖の霊を迎え入れる時節でした。門松(松の枝と竹でできた飾りで玄関の両脇に置かれる)や注連飾り(稲藁の綱でできた飾り)を飾る習慣は、これらの神や霊を迎えるのが目的でした。年の初めに人々は神々や先祖の霊に感謝し、新しい年の豊作を祈りました。このため、正月は、日本人にとって年中行事の中でも最も重要なものなのです。多くの人々はこのとき新年の計画を立て、決意を新たにします。

年賀状

正月の間に、人々は年賀状と呼ばれる挨拶状を、親族や友人、知人から受け取ります。1998年の正月に送られた年賀状の数は、約40億枚でした。

初詣

正月の間に、人々は家族や友人と連れ立って、神社や寺院にその年最初の参拝である初詣をします。神社の場合、伝統的には、人々は自分の家から見て「良い方角」にあるとされる神社に詣でました。この参拝の目的は、新年の豊作と、家族や家の無事を祈ることでした。参拝者が最も多いのは、東京の明治神宮です(1998年は345万人)。二番目に多いのが神奈川県にある川崎大師(319万人)、三番目が千葉県にある成田山新勝寺(315万人)です。

お年玉

正月の間に、子供たちは親や親戚から、お年玉と呼ばれる特別のお小遣いをもらいます。そのため、子供たちは正月をとても楽しみにするのです。近年、中学生や高

校生が5,000円や1 万円のお年玉をもらうことも珍しくありません。もらったお年玉を全部合わせると、その額は何万円にもなることもあります。

新年の遊び

昔の子供たちは皆、凧揚げやこま遊び(特に男の子)、女の子がする羽根つきなど、正月独特の外遊びをしたものでした。家の中での遊びは、歌かるた遊びがあり、これは百人一首を、参加者がどれだけ早く言い当てられるかを競うものです。ほかにも、西洋のバックギャモンに似た、すごろくと呼ばれる盤上遊戯もありました。しかし最近の子供たちは、あまりに多くの娯楽に囲まれており、昔は人気があった正月の遊びには興味を示しません。

春

節分

1873年以前に使われていた陰暦は、月の数え方が現代の太陽暦よりも約1か月半遅い暦ですが、この陰暦では、春の訪れ(立春または節分)は2月3日または4日と決められています。この日に行われていた節分の行事のいくつかは、今でも2月3日か4日、実際には一年で最も寒い時期といえる日に行われています。例えば、家の扉や窓を開け放ち、「福は内、鬼は外」と言いながら豆を空中に撒いて、災いと鬼を追い出すという儀式があります。また、この日に年齢と同じ数の豆を食べると健康でいられる、との言い伝えもあります。元来これは、陰暦の年の最後に宮廷で催された行事で、悪霊と冬の寒さと憂鬱を吹き払う象徴的行為であり、また、明るい新春の喜びを迎えるものでもありました。

雛祭り

雛祭りは、春もそう遠くない3月3日に祝われます。これは女の子たちの幸福と健やかな成長を祈って行われる年中行事です。この日、家の中では、雛人形という昔の宮廷衣装を着た人形を、桃の花や、白酒・菱形の餅(菱餅)・小さな米菓子(あられ)などのご馳走の捧げものとともに飾ります。雛祭りの行事は、清めの儀式についての古代信仰に発しています。ある時代には、人間の悪行と汚れは、水の流れの傍らで儀式を行うことで浄化されると信じられていました。後には、紙でできた人形がこうした儀式で用いられ、江戸時代(1600 ～ 1868 年)以降、この紙人形が現在のような雛人形の形態に変容していったのです。

春の彼岸(春分の日)

伝統的な行事である春の彼岸は、3月21日前後の春分を中心とした7 日間にあてられています。この日、人々は一家の墓を訪れ、先祖の霊を敬い、仏教の僧侶に読経を頼みます。同様の行事である秋の彼岸は、9 月23日前後の秋分の日を中心とした1 週間の間に催されます。

花見

3月の末から4月の初めにかけて、日本の大部分では、日本の国花である桜が咲き始めます。日本人は、満開の桜の木の下で、花見と呼ばれる陽気な宴会をするのを好みます。桜の木の下で飲み食いを楽しむ習慣は、江戸時代以降、庶民の間に広まりました。

ゴールデン・ウィーク

4月は、新学年が始まったばかりの学生や生徒たちにとって、また、財政年度の始まりに当たるこの月に就職したばかりの新入社員にとっても、なにかとストレスの多い時期です。しかし、4月末から、多くの人々は1 週間から10日の休みを取ります。それはこの時期に、4月29日の昭和の日、5月3日の憲法記念日、5月5日のこどもの日と、一連の祝日があるからです。加えて、1985年からは5月4日も祝日と指定されました(現在はみどりの日)。この時期は通常、「ゴールデンウィーク」と呼ばれます。気候は暖かく小旅行にも適し、日本中の観光地が観光客で賑わいます。「ゴールデンウィーク」は、交通渋滞や列車・空港の混雑でも知られています。こどもの日は「ゴールデンウィーク」期間中の5月5日で、伝統的には端午の節句と呼ばれており、男の子の健やかな成長と将来の成功を祈る日となっています。伝統的に飾られるのは、鯉をかたどった布製の吹き流しを棹につけたもの(鯉のぼり)と、侍の装いをした人形(武者人形)で、またこの日の特別のご馳走として、竹の皮に包まれた米の蒸し団子(ちまき)と、柏の葉で包まれた餅菓子(柏餅)が供されます。大昔は、一年の五番目の月は不吉な月であり、その五番目の日はとりわけ不吉であると考えられていました。端午の節句は最初、年に一度行われる、けがれを取り除く清めの儀式として発達しました。

この日、菖蒲の葉を浮かべた風呂に入るという習慣があります。伝統的にこの葉は、薬効があるばかりでなく、悪を祓う力があると考えられてきました。

夏

七夕

夏の最初の年中行事は7月7日の七夕です。これは、あるロマンティックな物語を記念する日ですが、その物語は最初、中国と朝鮮を経由して日本の宮廷に伝えられ、その後、庶民の間でも普及しました。そのストーリーは、一年に一度だけ、天の川の橋の上で、牽牛星と織姫星が出会うというものです。この日に願い事をすれば叶うと信じられており、人々は庭先などに、笹の葉が茂った竹を立て、その枝に願い事を書いた細長い紙片(たんざく)をつけます。

現在、七夕の祭りは日本中の多くの場所で見られます。そのうち特に有名なものは、京都の北野天満宮、香川県の金比羅宮、神奈川県平塚市や富山県高岡市で行われる祭りです。また宮城県の仙台七夕まつりも有名で、これは、かつて七夕が陰暦に従って祝われていた季節に近い、1 か月先の8月7日に行われます。花火大会は全国各地で行なわれ、夏の夜空は、色鮮やかな花火に彩られます。様々な地域で花火大会が催されるからです。日本の花火の技術は世界一といわれていますが、これは江戸時代から何世代にもわたって引き継がれてきたものです。現在の花火の打ち上げはコンピュータでコントロールされているものが多く、正確で、目を見張らせるような視覚的効果を高めています。東京では江戸時代から、隅田川沿いの花火大会が年中行事として有名です。

盆

盆またはお盆は、その年のこの時期に戻ってくるとされる、その家の先祖の霊を

迎え入れ、なぐさめる年中行事です。伝統的には、陰暦の7月の半ばに行われていました。現在お盆は、ほとんどの地域で7月13日から15日の間、また別の地域では8月13日から15日の間に行われます。7月13日に迎え火が焚かれて、先祖の魂が呼び入れられます。そして16日には送り火が焚かれ、先祖の霊はあの世に戻ります。盆の間、多くの会社や店は閉まります。また、故郷を離れて働く人の多くは家族を連れて帰省するので、「ゴールデンウィーク」同様、交通機関は大変混雑します。

秋

月見

陰暦の9 月の半ば頃に現れる満月は、中秋の名月と呼ばれました。そして、この月の美しさを観賞するため月見の宴を開くことが習慣となりました。これはもともと中国で行われていた習慣ですが、平安時代(794 ～1185 年)に日本にも広まりました。家々ではススキの穂を飾り、団子を作って、これらを秋の収穫物などとともに月に捧げます。

七五三

11月15日は、3 歳・5歳の男の子と、3歳・7歳の女の子を連れて神社に参拝し、その子たちの安全と健やかな成長を祈るための日です。伝統的に男の子は羽織と袴を着け、女の子は着物を着ますが、現在ではスーツやドレスを着た子たちも大勢見られます。この日、神社では、長寿をもたらすとされる千歳飴という飴を買い、家では、小豆とともに炊いたご飯(赤飯)や、頭と尾ひれがついたまま焼かれた鯛(尾頭付きの鯛)を食べて、家族でお祝いをします。

冬

忘年会

12 月初め以降、忘年会と呼ばれる年末のパーティが、飲み屋やレストランで開かれます。忘年会には、その一年よく働いたことを互いに認め合って感謝し、同時に苦労を忘れ、年末をよりよく過ごせるようにとの思いが込められています。日本人は忘年会が大好きで、あらゆる年代、あらゆる種類の集団に属する人々が、学生やサラリーマンも含め、忘年会のスケジュールで忙しくなります。ほとんどの場合、費用は参加者の割り勘ですが、会社が従業員のために忘年会のスポンサーとなり、費用を負担するというケースもあります。

クリスマス

日本ではクリスマスは、季節の行事として普及しています。キリスト教徒であるなしにかかわらず、日本人はクリスマス・ツリーを飾ったり、クリスマス・ケーキを食べたり、クリスマス・プレゼントを交換したりするのを楽しみます。子供たちにとっては特に楽しみな行事で、眠っている間にサンタクロースがプレゼントを持ってやってくるのを待ちわびます。

大晦日

クリスマスが過ぎ、忘年会も終わると、まもなく12 月31 日、日本語でいう大晦日となります。真夜中の少し前から、全国の寺では、「除夜の鐘」と呼ばれる鐘つきが始まります。鐘は108回つかれますが、それは108あるといわれる現世の欲(煩悩)の清

めを象徴しています。そして、正月の行事とともに新たな年が始まるのです。

4. 日本の祝日

現在の日本の公定休日は 15 日あります。その基本は太平洋戦争後の昭和 23 年 7 月 20 日に公布、施行された「国民の祝日に関する法律」(略して祝日法)です。昭和 41 年には建国記念の日、敬老の日、体育の日が追加されました。平成になると、それまでの天皇誕生日がみどりの日に、皇太子誕生日が天皇誕生日になり、平成 8 年には海の日が加えられました。こうした祝日の趣旨、由来をみてみましょう。

1月1日　元日

年の初めを祝う日です。「一年の慶はは元旦にあり」と言われます。

1月第2月曜日　成人の日

「大人になったことを自覚し、自ら生き抜こうとする青年を祝い励ます」

陰暦の正月 15 日は、新年最初の満月の頃で、各地で豊作を願い、また悪霊を払うドンド焼きなどの行事が行われました。新暦の 1 月 15 日を成人の日とし、年の初めに人としての豊かな成長を祈る思いが込められています。平成 10 年の祝日法の改変により、平成 12 年より 1 月第 2 月曜日と定められました。

2月 11 日　建国記念の日

「建国をしのび、国を愛する心を養う」

日本の最古の歴史書「古事記」、「日本書紀」(記紀)による人代の最初の天皇、神武天皇即位の日です。神武天皇は九州より東征して 5 年目に大和に入り、その 3 年後の「辛酉年の春正月、庚辰の朔(ツイタチ)に、天皇、帝位(アマツヒツギ)を橿原宮に即(シロシメ)す」にいたったとされます。この日付を現在の暦に変換すると 2 月 11 日となります。西暦紀元前 660 年のこのときを元年とする年の数え方を神武天皇即位紀元、あるいは皇紀といいます。

春分の日(3月21日頃)

秋分の日(9月23日頃)

この両日は、一年における 2 度の昼夜等半の日にあたり、中日と言い、この前後 3 日を彼岸といいます。日本古来から自然を大切にする心を大切にされ、四季を通して節目を大切にしてきた日本人にとって、この中日はこの日を境に昼と夜の長さが逆転するという自然の法則を一つの節目として考え、意義のある日です。

この日は神社詣り、墓参り、寺詣りなど行う慣習がありますが、これは祖先崇拝、故人追憶の日としても現在もなお息づいています。

宮中においてもこの両日には春季皇霊祭、秋季皇霊祭として歴代の天皇・皇后・皇族を祭る日として天皇自らのお祭りが行われています。それぞれの神社においても同様のお祭りが行われています。

4月 29 日　みどりの日

「自然に親しむとともに、その恩恵に感謝し、豊かな心を育む」

在位 64 年と歴代最長となった昭和天皇のお誕生日です。戦争、敗戦、復興、繁栄と未曽有の歴史をたどった昭和の記念日といえるでしょう。新しく祝日法が制定されるとき、明治天皇の誕生日が文化の日として残された例にならっています。

5月3日　憲法記念日

「日本国憲法の施行を記念し、国の成長を期する」

現行の日本国憲法は、昭和21年11月3日に公布されました。これは先の大日本帝国憲法が、明治22年2月11日の紀元節の佳日に公布された先例にならい、明治節の日が選ばれたものといわれます。そうすると憲法記念日は11月3日でもよかったのです。ところが当時の人々は明治節への愛着が強く、何とか明治天皇ゆかりの日を残そうとしました。そのため憲法記念日は翌22年の施行のこの日となったのです。

5月4日　休日

「前日、および翌日が祝日となる日は休日とする」

昭和60年の暮れ、上のような祝日法の追加条項が加えられました。ところが翌年、翌々年は日曜となったり振替休日となったため、実際この条項が生きて実施されたのは昭和63年の5月4日が最初となりました。そのため暦によってはこの休日が記載されていないものもありました。ちなみに祝日と日曜日が重なったとき、翌月曜日を休日とする「振替休日制」が公布されたのは昭和48年です。

5月5日　こどもの日

「こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する」

元来、3月3日と5月5日は、もとの上巳(3月上旬の巳の日)と端午(5月最初の午の日)が3日と5日に固定したものです。正月7日(人日)や7月7日(七夕)、9月9日(重陽)とともに、平安時代頃から五節句とされていました。5月5日は、菖蒲を飾って邪気を払ったのが、尚武や勝負につながり、勇壮な男の子の祝いとされたのです。なおこの日は「母に感謝する」日でもあります。

7月第3月曜日　海の日

「海の恩恵に感謝するとともに、海洋国家日本の繁栄を願う」

平成7年に制定された最新の祝日です。この日は明治天皇が東北ご巡幸のあと、青森から船に乗り、函館を経由して横浜港に着かれた日といわれます。平成13年の祝日法の改変により、平成15年より7月第3月曜日となる。平成14年までは7月20日でした。

9月第3月曜日　敬老の日

「多年にわたり社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う」

昭和38年に「老人の日」と制定された9月15日が、昭和41年国民の祝日となりました。来るべき高齢化社会を先取りしたものと評価されています。平成13年の祝日法の改変により、平成15年より9月第3月曜日となりました。平成14年までは9月15日でした。

10月第2月曜日　体育の日

「スポーツに親しみ、健康な心身をつちかう」

昭和36年制定のスポーツ振興法に、10月第2土曜日を「スポーツの日」と定めています。秋晴れの候で、昭和39(1964)年の10月10日は東京オリンピックの開会式の日です。2年後の昭和41年、建国記念の日、敬老の日とともに10月10日は体育の日となりました。平成10年の祝日法の改変により、平成12年より10月第2月曜日と定

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com